

大内初夫・尾形侑・櫻井武次郎・白石悌三・中西
啓・若木太一編『去来先生全集』

石川, 八朗
九州工業大学教授

<https://doi.org/10.15017/12033>

出版情報：語文研究. 55, pp.53-55, 1983-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

大内初夫・尾形 仵・櫻井武次郎
白石悌三・中西 啓・若木太一 編

『去来先生全集』

石 川 八 朗

『去来先生全集』が刊行された。蕉門俳人としては、全集の刊行は、去来がはじめてであろう。大内初夫、尾形仵、櫻井武次郎、白石悌三、中西啓、若木太一の諸氏の編にかかる。七百頁に余る大型の一冊は、ずっしりと重く、その学的充実を予感させる。内容は、評伝篇(尾形)、発句篇(中西、若木)、連句篇(桜井)、文章篇(白石)、書簡篇(白石)、俳論篇(大内、尾形)、編纂篇(若木、桜井)、追悼篇(大内)、年譜篇(大内)と、去来研究文献目録、索引から成る。

去来が蕉門屈指の俳人であることは、今さらいうまでもない。貞享初年の芭蕉入門以後、『猿蓑』撰前後や芭蕉晩年の重要な時期に接して指導をうけ、その没後は、許六との論争、『去来抄』の著述等、篤実に蕉門としての活動を展開している。

今、その活動の諸方面が、右のような各篇にまとめられて、去来

の全業績が、学問的検討を経た、最も正確な形で提出されたのである。

去来全集が計画されたのは、実は昨今のことではない。昭和二十九年四月、その二百五十年忌を記念して、去来顕彰会から大著『向井去来』が刊行された折、それに全集を付載する予定があったという。その後も幾度か企画はあったらしいが、実現しなかったようである。本書を手にして、このことにかかわられた方々の感慨のほどもさぞかしと思いやられることである。

さて、評伝篇は、去来の生涯をたどりながら、元禄の社会に一種の知識人的隠士として生きたこの人の全人像を、多様な視点から描き出している。簡潔な文章に盛られた豊富な内容に驚かされる。

発句篇は、『向井去来』の「纂註去来句集」を改編し、これに補訂を加えた類題形式の発句集である。真蹟短冊や句稿等によって新

たな句が加えられている。

連句篇は、百韻、歌仙から付句のみのもので、六十余篇を収める。他に存疑三篇。

文章篇は、「盛久の伝」をはじめとして、十六篇を収め、存疑として、「夜ときの詞」一篇。連句篇ともども、適切な解説によってこれらの作品の作られた事情を知ることができる。

書簡篇は、去来の発信および受信の書簡を収めてある。三十九通のうち、発信二十二通（うち二通は俳論篇所収）、受信十七通。うち芭蕉書簡が十四通にのぼる。存疑書簡三通。参考として、「蕉翁消息集」等所収の去来宛芭蕉書簡が五通添えられている。年次順に配列されているので、去来を中心とした俳壇の動静、とくに芭蕉との関係がたどられ、両者の交渉の深まりを読みとることができる。去来の書簡は、近年に重要なものが紹介されており、それらは雑誌に散在しているので、このように集成されるのは、有難いことである。

俳論篇は、「不玉宛論書」「浪化宛去来書簡（真蹟去来文）」「許六宛去来書簡」「贈其角先生書」「俳諧問答」「旅寝論」「去来抄」（稿本・写本の七篇と、参考として、「板本去来文」等十篇を収める。去来の舊門としての存在意義の中で、その俳論が大きなウエイトをしめることについては、何人も異論はないであろう。参考にかかげられた諸篇は、「去来湖東問答」（宝曆十一年刊）、「旅寝論」（安永七年刊）や「去来抄」（安永三年刊）など、去来俳論の板行されたものや、「去来抄」によって作られた偽書「俳諧花実集」、「去来抄」の内容を抜抄して初めて世に紹介した、絢堂素丸編「俳諧教訓百首」（宝曆五年刊）中の「去来先生確論」のほか、「俳諧

無門関」「落柿舎遺書」「修行地」など、去来俳論の後世における影響伝播を示す資料である。

編纂篇は、「猿蓑」「渡鳥集」の二書を収録。参考として「去来発句集」「落柿舎日記」が付載されている。「渡鳥集」には、大東急記念文庫蔵の自筆稿本（「夜巻」の一部）が付載されている。

追悼篇は、「本朝文選」（宝永三年刊）所収の許六の「去来が誄」、追善集として、久米元察・吾仲編「誰身の秋」（宝永二年刊）爪堤軒不雄編「菊の杖」（享保元年刊）、重厚編「去来忌」（明和八年刊か）、河上庵泰里編「むかしぎく」（天明四年刊）、泰溪編「菊のうはさ」（寛政十一年刊）、句碑建立記念集として、小菟庵支元編「いはゞな集」（寛政十二年刊）が収まり、参考として、佐々木尚義の「落柿先生行状」、向井元仲の「落柿舎去来先生事実」貝原益軒の「向井元升墓碑銘」（向井元升は去来の父）、三宅尚齋の「久米升顕墓碑銘」（久米升顕は去来の叔父）を添えている。年譜篇は、「向井去来」の「向井去来年譜」に、その後の新出資料などによって補訂を加えたものである。

去来研究文献目録は、昭和五十六年九月ごろまでのものを収めている。また、索引は、発句、連句（付句）、人名、地名、書名、俳諧俳論用語、引用句と、多面からの検索が可能ないように配慮されている。

なお、口絵は十三頁にわたり、「去来抄（稿本）」をはじめ、真蹟短冊、句稿等が巻頭を飾っている。ことに、「不玉宛論書」の、大東急記念文庫蔵の「去来抄（稿本）」の紙背に書かれた初稿、再稿のすべてが収められているのが注目される。

以上見てきたように、本書は、去来の残した業績や関係資料を集

